

実践とは何か

－「知る」と「行う」と－

岸見一郎（京都）

要旨

On practice - To Know and To Do

In this paper the author clarified Adler's basic idea on the theory (to know) and the practice (to do) on the basis of Greek philosophy. Adler denies the so-called *acrasia*, which means that one can never escape the responsibility of her/his action in the sense that she/he can always decide and choose what to do under whatever circumstance.

キーワード：

1. ねらい

本稿^{*1}では、先に発表した原因論と目的論についての考察^{*2}の結果を踏まえ、アドラーが理論と実践についてどのように考えているかを、ギリシア哲学以来の伝統を踏まえて考察する。内容については重なるところもあるが、重複をいとわず議論したい。

野田は、アドラー心理学の全体が科学ではない、そこには一つの価値判断を含んでおり、科学的というよりは、哲学的・倫理的といえる部分を理論のうちに内在させている、という^{*3}。即ち、共同体感覚、他者への貢献、協力…これらのことはいわば価値の領域に属するものであって、理論とは区別して考えるわけである^{*4}。本稿の目的は、野田がいうところのアドラー心理学の理論的な側面と思想的な側面の接点を見極めることにある。

2. 考察の出発点

2-1. 目的論はコモンセンスか？

中島は、「アドラー心理学の多くは、コモンセンスといってよいものである」と書いている^{*5}。当然、アドラー心理学の基本前提の一つである目的論も、コモンセンスのはずであるが、必ずしもコモンでないようにも見える。目的論という言葉だけがいわば一人歩きしており、実のところ、その意味があまり理解されていない、あるいは、誤解されているのではないかと、思われるからである。そこで、目的論という言葉の意味を自明のものとはせず、理論的に整理する。そのことによって、目的論の意味、及び、目的論とは対極に位置する原因論についても、その意味、及び、原因論の内包する問題点を明らかにしたい。

2-2. 世界解釈

マルクスは、大切なことは世界の解釈ではなく、世界の変革である、といった^{*6}。しかし、複雑な世界解釈に基づく変革は有害以外の何ものでもない。このことは治療についても妥当する。アドラーはたしかに自らの理論について、いかなる理論の価値もそれが有用であるかどうかにかかっているとするプラグマティズム（実用主義）との関係を見るが^{*7}、そのことは理論を重視しないということではないのである。

3. アクラシアーとは何か？

3-1. アクラシアーの意味

プラトン、アリストテレス哲学においては、アクラシアー（akrasia、もしくはプラトンの場合は、アクラテイア akurateia という用語が使われる。無抑制、意志薄弱）という事態があるかどうか、ということが一つの重要なテーマになる。

アクラシアーという事態は、例えば意志が薄弱であるという理由で、あることが善であることを知っているにもかかわらずできない、あるいは、悪いと知りながらもそのことを行う、というような場合である。あるいは、常は非常に理性的な人が、何かのおりに「つかかっとなって」暴力をふるう、というような場合である。

感情が人を圧倒して、その人が本来持っている理性が力を持ちえないことがあるというわけである。

3-2. 徳は知である

ソクラテスの答えは簡単である。アクラシアーの存在を認めないのである。アクラシアーは無知に他ならない、と考える。プラトンの初期の対話篇においては、積極的な断定はないが^{*8}、「徳は知である」といわれている。この命題の意味については、多くの研究があるが、今は立ち入らない。例えば、徳の一つである正義について、正義とは何かを知っていれば、人はそれを知ることによって必ず正義の徳を身につけることができる、というのがこの命題の意味である。逆に、正義とは何かを知っていても、正義を実践できない、正しい行為をなしえないとすれば、正義について知らない、という意味である。この立場は、アクラシアーを否定する。正義とは何かを知っていながら実践できない、ということ認めず、もしも知以外のものに屈してしまうようなことがあれば、本当には知らないということの意味するからである。

しかし、知るだけで、あるいは、知識や理論が直ちに実践をもたらすのだろうか。人間の心理の複雑さや行為の非合理的な面を見過ごしているのではないか。むしろ、常識はこのような主知主義を疑う、あるいは、「徳は知である」という考えは、あまりに楽観的にすぎる、と考えるのではないだろうか。アクラシアーという現象を認めるということは、知ることは直ちに実践にはつながらない、と考えることである。

3-3. 主知主義への懐疑

プラトンの対話篇の中にも、

「多くの人々は知識というものを、何か強さも指導力も支配力もないようなものと見ていて…たとえ人間が知識をもっているとしても、いざ実際に人間を支配するものは、しばしば知識ではなく、何かほかのもの—あるときには激情、ときには快樂とか、ときには苦痛、ときには恋の情熱、またしばしば恐怖などであると、考えている」（Prt.352b - c、藤澤令夫訳）といわれている。

これが上に見た「アクラシアー」である。何をすべきかを知っていながら、他の情念に妨げられ、なすべきことを行えないことがあるのではないか。このアクラシアー、あるいは、アクラシアーに見える事態において何が起きているか、考えなければならない。

4. 「善」の意味

4-1. ソクラテスのパラドクス

もう少し言葉を厳密にしよう。この点については先の論文でも取りあげた^{*9}。

ソクラテスのパラドクスの一つとして、「誰一人として悪を欲するものはない」(Meno, 78b)ということがいわれている。これは逆にいえば、何人も善を欲している、ということであるが、これがパラドクスといわれるのは、悪を欲する人もいる、と普通には考えられているからである。しかし、ここでいわれている善悪は、道徳的な意味での正義、不正ではないのである。

一般に、ギリシア語の「善」(agathon)という言葉に道徳的な意味はない。そうではなくて、「ためになる」という意味である。反対に、「悪」は「不正」という意味ではなくて、「ためにならない」ということである。このように考えると、「誰一人として悪を欲するものはない」というパラドクスは、誰も自分のためにならないことを望む人はいない、さらに通俗的な言葉を使うならば、誰も自分が不幸になることを欲するものはない、あるいは、誰もが幸福になることを欲している、という意味なのである。幸福であることを願わない人はいないであろう。そのように見れば、「誰一人として悪を欲するものはいない」ということは、人は皆、善、即ち、幸福を求めている、という事実を語っただけであり、パラドクスとすらいえないことになる。

4-2. 何が善かは自明ではない

しかし、では、何が善であるか、何が人を幸福にするか、ということになると、人によって意見は一致しない。例えば、正義についていえば、正義を行っている人は、それを心ならずも行っているのであり、本心から正義の人ではないかもしれない。即ち、もしも、誰にも知られることなく、不正を行う機会が与えられたとしたら、不正を犯すかもしれないのである。

しかし、ソクラテスは、善と正義は究極的には一致する、と考えている。ソクラテスはいう。「大切にしなければならないことは、ただ生きることではなくて、善く生きることなのだ」(Crito, 48b, 田中美知太郎訳)

この「善く」がこの対話篇では、既に結論ずみのこととして、「美しく」あるいは「正しく」を意味する、とされている。... しかし、話がここまでいたるには、この対話篇では決着がついているのだが、他の対話篇では、まさにこの点が議論される。

5. 再びアクラシアー

話を戻すと、あることが<善>であることを知っているにもかかわらず、意志が薄弱であるという理由でできない、というようなことがあるとした場合、可能性はいくつか考えられる。

5-1. アクラシアーの否定

(1) 実は、その知そのものが誤っているか、(2) その知そのものは誤っていないが、感情などに圧倒されてしまう、か、(3) 先と同じく知そのものは誤っていないが、別の知が初めの知に

取って代わり、そちらの方が優位を占める、というふうに考えることができる。それぞれの可能性について検討してみる。

まず、(1) については、知が誤っているのであれば、「知っているのにできない」というアクラシアーの定義に反するので、知が誤っているのであれば、アクラシアーではない、といわなければならない。ソクラテスはこの解釈を採る。

次に、(2) であるが、アドラーはこれを採らない。感情によって（この点については後に詳述する）人が圧倒されるということはない、と考えるからである。

(3) は、アクラシアーを否定する解釈である。この点については後述する。実は、(2) の立場を逆転することによって、アクラシアーを回避する解釈は可能であるが、私はこの解釈を採らないし、アドラー心理学の立場でもない。この点についても後述する。

6. 目的論

さて、目的論とは何か、ということについて確認しておきたい。

6-1. 「なぜ」の意味するもの

アドラーは、「なぜ」(why) という問いは、心理学者でも答えるのはむずかしいという。「なぜ」という言葉に含意されているものがはっきりしないのである。子どもに「あなたはなぜそんなことするの？」とたずねても満足いく答えは返ってこない。怠惰である子どもに、なぜあなたはそんなに怠惰であるのか、とたずねても、嘘をつく子どもに、なぜ嘘をつくのか、とたずねても、子どもがその問いに答えることは期待できない、そもそもそのような問いは「心理学者にとってすら困難な質問」である、といている。アドラーは、このような行動について「なぜ」と問う時、「原因」(cause) という言葉を使う。しかし、この言葉を使う時、それは「厳密な物理学、科学的な意味での因果律」(causality in the strict physical – scientific sense) ではない、と注意している。何かが「原因」となって、問題が必ず起こるわけではないのである。アドラーは、むしろ、「なぜ」という問いによって、行動の「目的」を答えとして期待している。「どこから」(whence) ではなくて、「どこへ」(whither) を問うのである^[*10]。

6-2. アリストテレスの四原因論

アドラーは、ここで「原因」(cause) という言葉を使っているが、アドラーが斥けたのは、外的、あるいは、客観的因果関係、アリストテレスの言葉を使うと、作用因、あるいは、始動因であって、内的因果関係、あるいは、(アリストテレスのいう) 目的因としての原因ではないことに注意したい^{*11}。アリストテレスの四原因論説については、先の論文で論じたので^{*12}、ここでは詳論はしない。素材因、作用因(始動因)、形相因、そして、目的因である。

6-3. プラトンの原因論

プラトンは、このうちの前三者を「副原因」(synaition, sine qua non) と呼んだ。これについても先の論文^{*15}に詳細は譲るが、例えば、ソクラテスが死刑の執行を待ちながら、獄に留まっていることの「原因」として、身体的な条件に促して説明してみても、それらは「それなしには」原因も原因として働くことのでき「ない」必要条件であって、「真の原因」ではない、と考える。この「真の原因」こそ、先に見た・善、即ち、ここに留まっていることを「善し」と判断することであり、逆にソクラテスが脱獄することを「善し」と考えたら、たとえ条件が同じであっても、

ただちに立ち去っていたであろう、と考えることができる。

ソクラテスは、自分が捕われの身になっていることの「原因」（実は、目的）を次のように説明している。

「アテナイ人たちがぼくに有罪判決を下すのを善しとし、それゆえ、ぼくはぼくで、ここに座っているのを善いと思い、とどまって彼らの命じる刑には何でも服するのがより正義であると思った」（Phd., 98e）

ソクラテスは、これを「真の意味の原因」（ibid.）と呼ぶ。このようにプラトンは、真の原因（目的）と、副原因をはっきりと区別している

6-4. コモンな考えとしての目的論

アドラー心理学における目的論を論じていると、何かこの目的論が特別のことであるかのような印象を与えることがあるが、実際には、それほど特異な発想ではないといえる。なぜなら、そもそもある動きが機械的、あるいは、因果的に捉えられる出来事（Vorgang）ではなく、「行為」であるといえるためには、まず、行為に先立って「意図」を抱き、「目的」を立てなければならないからである。

もちろん、このような行動の意図や目的は必ずしも自明ではなく、意識されていないことはある。次に、この目的の達成を可能にする手段を選択する

6-5. 誤る可能性

この手段の選択において人は誤るのである。しかし、自然現象や本能に基づいた動きには、基本的に誤るということはないが、行為には行為選択の可能性がある。間違うにせよ、ここに自由意志の根拠があるといえる。

6-6. 柔らかい決定論

この手段の選択、また、そもそも目的自体を決める時に（これについては後述するように、「善」であるという点においてはどの目的にも相違はない、と考えることができる）、例えば、遺伝、環境、器官劣等性、過去の経験などを利用する^{*14}。その意味で全く何もないところでライフスタイルを形成するということはないのである。しかし、目的因以外の原因をアドラーが問題にしなかったわけではない。例えば、ライフスタイル形成論は、アリストテレスのいう始動因を問題にしているのである。この意味で、目的因以外の原因は、中島がアドラーを引いて説明しているように^{*15}、「目的に奉仕する」ものである。このような意味でアドラー心理学は、「柔らかい決定論」（soft determinism）である、といわれる^{*16}。

7. 原因論の位置づけ

ところが、以上のように考えていくと、目的論も原因論もどちらの立場でも採れるかのような印象を与えるかもしれないが、そうではない。先の論文で明らかにしたように、両者は決して相容れない（incompatible）考えなのである。先に、原因論が「どこから」を扱い、目的論が「どこへ」を扱うといったが、過去に原因があつて、未来に目的がある、というふうには考えないのである。そうではなくて、目的は、個人の想像、イメージであつて、現実的なものではないのである。アドラーは、この目的について「仮想的」（fictional）という表現をしている。実は、原因ですら（例えば、遺伝、環境、器官劣等性、過去の経験など）客観的に存在しているのではない。

この点については後述する。

8. 現象論

8-1. 客観的な世界はない

人は誰もが等しく経験する、客観的な世界に住んでいるのではなく、自分自身の興味、関心に従って、世界を知るのである。このことは、アドラー心理学が原因論を採らないことの重要な根拠になる。

8-2. 実体の消去

8-2-1. 背丈

例えば、人の背丈は、何センチメートルという基準で計れるものであると考えられるが、その人が横に並ぶ人によって、その都度、背が「実際に」高くなり、逆に、低くなるのである。ある年、息子がこんなことをいったことがある。彼の身長は年々目に見えて伸びる。「僕が一年前に比べて背が高くなって、お父さんよりも背が高くなった、ということは、お父さん〔の背〕が低くなったということだ」と。これをはたして子どもっぽい考えとして斥けることができるか。プラトンであれば、はっきりと、私の背の高さは同じままではなく、「実際に」変化した、つまり、小さくなった、と答えるであろう。私の身長は 155cm であるが、この 155cm という数値の身長そのものが「大きい（あるいは小さい）」「背が高い（あるいは低い）」という意味に他ならないという考えを絶対拒否するということである^{*17}。

8-2-2. 井戸水

また、井戸水は年間を通じてほぼ 18 度であるが、冬は暖かく、夏は冷たく感じられる。この事態をどう考えればいいのか。年間を通じて計られる温度が一定であるということから、井戸水の温度は本当は一定であり、それをある時は冷たく、ある時は温かく感じるのは「主観的」な感覚として斥けなければならないのか。夏から冬になって井戸水は本当に温かくなったのか、と問われれば、そうだ、と答えてはいけないのか。

8-2-3. 貨幣の価値

以上の二例は、あるいは、奇異に聞こえるかもしれないが、貨幣の価値を考えれば、事情は明らかになるであろう。例えば十年前の五百円と今の五百円の価値は同じなのか、違うのか。もしもこの問いに対して数字の金額が同じなのだから、「同じである」と答える人がいるとすれば、その人は常識を疑われるであろう。なぜなら、明らかに十年前に五百円で買えたものが今は買えないからである。この事実を前にして、そうではないのだ、貨幣の価値は変わらない、なぜなら、当時も今も同じ五百円なのだから、と考えることはできないのである。

8-2-4. 主観的世界

とすれば、他の現象においても、井戸水を例に取れば、冬に温かく、夏に冷たいのは、事実なのであって、本当は夏も冬も同じ温度なのだけれども、たまたま我々の主観が温かく感じたり、逆に、冷たく感じたりすると考えるほうが無理があるように思われる。いったい、我々のこの感覚を離れた世界というものを想定することができるのであろうか。もとより感覚を通して知られ

る世界が、そのまま真実であると考えるのはいきすぎである。感覚が人を欺くということはたしかにある。しかし、それはそれとしてあらゆる感覚や価値を排除した客観的な世界（これがギリシアの原子論が想定した世界である）は、思考上想定することができても、それ以上のものではないのである。上に見たいずれの場合も、大きい、小さい、温かい、冷たい、という性質は、状況の変化と無関係にそれだけで単独に同定されるわけではないと考えることができる。

9. <反>原因論

このように考えることができるのであれば、何かの物や出来事がただちに人に影響を必ず及ぼすと考えることはできないことになる。例えば、甘やかされた子どもがいるとする。その子どもが甘やかされているとすれば、そのことの原因は母親であるということとはできない。たしかにアリストテレスの原因論に従えば、母親は作用因、あるいは、始動因ではある。母親がいなければ、「母親に甘やかされた子ども」はいない。しかし、それでは、その母親に育てられた子どもが必ず甘やかされた子どもになるかといえばそうだとすることはできない。同じ母親に育てられたきょうだいのうちあるものは甘やかされた子どもになり、あるものはそうでないとすれば、一体この事実をどう考えればいいのか。

ここにアドラー心理学の<反>決定論がある。ライフスタイルを決定するのは、本人である。reactorではなく、actorである人は外の原因によってのみ影響を受けるのではない。しかも、この外的な原因でさえ、人の主観（doxa, Meinung, opinion）を離れては存在しない。人の自分や世界についての見方（即ち、ライフスタイル）が、ただちに世界の変化をもたらすとすらいえる。世界は客観的なものとして存在するのではなく、それについての見方は、人によって異なる。その見方が外界の始動因の影響に及ぼす。主観的な認知様式に変化を及ぼすということだけではなく、世界についての見方の変化は、そのまま世界の「変革」なのである。

10. 価値の問題

このように考えること自然な流れとして「価値」の問題を扱わないわけにはいかない。中島が、ドライカースのインタビューを引いている^{*18}。アドラーは彼の時代より 50 年先を生きていたといえる。もし、理論物理学による革新がなければ、ガリレオ、コペルニクス、そして他の学者によって始められた因果—決定論的な時代を終わりにすることはできなかっただろう、と。ギリシア自然学についてここで詳論することはできないが^{*19}、「物が空間と時間の中を動く」というモデルは今日通用せず、19 世紀末から 20 世紀初め以降の科学の新たな展開は、原子をアトム（不可分なもの）ではなくならせた。原子よりさらに基本的な存在としての素粒子については、「物」として完全に運動を追跡することは最終的な場面ではできないことが今は完全に認定されているので、原子論が描く世界像は世界の究極のありのままの姿であるとは考えられない。ということは、世界の中に「価値」が初めから組み込まれている、と私は考えているのであるが^{*20}、アドラー心理学を理解するためには、最初にいったように、理論的な側面と思想的側面を区別しておくのが望ましいであろう。即ち、行動の目的として、直ちには共同体感覚、他者への貢献、協力などのアドラーの思想を考えないということである。

しかし、そのことは、ちょうどプラトンが究極的には善と正義の一致を考えているように、共同体感覚などを行動の目的に一致させるレベルで目的論を考えるということであって、そこで終

わりにするというわけではない。

11. 中立的な目的

行動の目的はギリシア哲学の視点からは「善」（正確に言えば、「善」と人が解したもの）である。アドラーの場合は、個人が自分と他者を動かすのが行動の目的であるが、アドラーの場合も必ずしも道徳的なことが含意されている必要はない。自分の都合、私利私欲であってもいいわけである。ただし、実際に、では自分のことだけを考えていればいいのか、というレベル（即ち、思想的側面）のことを問題にすれば、話が違ってくるだろう。人生の意味は他者への貢献である、というふうに、他者が視野に必ず入ってくる。

12. 原因論をどう見るか？

12-1. Semblance of Causality

このようにすぐに行動の目的として価値的なものを考えないことのメリットは原因論について、次のように考えることができる、ということがある。原因論は、先に見たように、ライフスタイル形成の際の始動因を考えるような場合のことを考えることができる。もちろん、その場合、始動因となりうる事象は決して客観的に存在するものではないことは既に見た通りである。

しかし、ここで問題にしたいのは、アドラーが 'semblance of causality' と呼んでいるものである^{*21}。即ち、因果関係があるかのように見せる、ということである。

アドラーが『人生の意味』の中であげている例に即して考えてみる^{*22}。主人の側について歩くことを訓練された犬がある日車に跳ねられる。この場合、この犬が跳ねられたのは、不注意によるものだったと思われる。しかるに犬はそのようには考えない。「この場所」が怖い、という。そしてその場所には近づかないようにする^{*23}。神経症者もこれと同じである、とアドラーはいう。面目を失いたくないが為に、ある出来事を自分が人生の課題に直面できないことの原因とするのである。アドラーの言葉を引けば、「事故に遭ったのは、場所のせいであって、自分の不注意、経験のなさのせいではない」と結論づけたのである。そして、危険はこの場所で<いつも>その犬を脅かし、この考え方に固執した。

このように、あることを出来事の（しばしばマイナスの出来事の）原因として、今の自分の状態を説明するという事態を *semblance of causality* とアドラーは呼んでいる。本来因果関係がないところに因果関係があるかのように見せる、という意味である。原因論も、このように考えると、広い意味で目的論に包摂される、と考えることができる。なぜなら、原因論的に考えることは、当人にとって「善」である、即ち、何かのせいで自分がこうなった、と原因論的に考えるほうが都合がいい。なぜなら、原因論的な説明は、何らかの意味で責任を逃れることに手を貸すものである、と考えることができるからである。この意味で原因論は、目的論に包摂される、といえる。即ち、原因論を選択するということが、「目的」たりうるのである。このような場合の目的が、直ちにアドラーが考えるような価値に結びつかないことは明らかである^{*24}。

13. もう一度アクラシアー

アクラシアーに話を再び戻すならば、人は、もしもある行為が本当に当人にとって「善」であることを理解していれば、それ以外の行為をすることはないのであろう。もとより、初めからある行為が目的達成のための手段ではないのに、その行為によって目的が達成できる、と理解している場合もあるだろう（先に見た不正を善であると考えているケース）。しかし、もしもその知が誤ってはならず、かつ人が一見アクラシアーと思えるような行為をしたとすれば、情念などに圧倒されたからではない。

そうではなくて、任意の時 t_1 における、あることが善であるという知（これを「知 (t_1)」と名づけることにする）は、別の任意の時点 t_2 においては別の知（これを「知 (t_2)」と名づける）にとって代わられているということである。

しかし、そのことは、知 (t_1) が知 (t_2) に「負ける」というようなことではない。もとより、アドラー心理学は採らない考えであるが、激情、快楽、苦痛、恋の情熱、恐怖といった情念に圧倒されるというのでもない。

14. 個人の主体性

そのようには考えないのである。知の力というものを考えることは、実は、目的論ではなく、原因論的な思考の枠組みにはめ込まれている、といえる。先に「主知主義」という言葉を使ったが、アドラー心理学では、個人（この個人、individual は分割できないものという意味^{*25}）が、知、あるいは知性を使う、と考える。

したがって、先にも引いたプラトンのテキストに見られるように、情念が人間を支配するのはもちろんなく、しかし、他方、知が個人を指導力、支配力を持つのもない。むしろ、個人が広い意味での精神機能、即ち、個人が感情・心・性格・ライフスタイル・病気・過去の経験・理性・思考 etc. を使うのであって、決して逆ではない。

そのように考えると、アクラシアーというような事態は、本来、ありえない。なぜなら、そのようにすべきことを知っているのにできない（と考える）、ということが既に、ある目的に合うことだからである。アクラシアーは、ある知を使わないでおこう、と決心することであり、決して、知に支配されることではない。

アクラシアーは「ない」ということである。即ち、ある行為が自分にとって善であることを知っていながら、それを行えないということは「ない」のである。そのようなことがあるように見えたとしても、実は、その知を実践しないでおこうという個人の決心によるものなのである。

15. 治療的意義

最後に、原因論の立場でいかにそもそも教育、育児、治療が可能なのか、と疑問に感じるということを目指したい^{*26}。昨今、PTSD（Post-Traumatic Stress Disorder：外的外傷後ストレス障害）のケース、あるいは、アダルトチルドレンを自称する患者と関わることが多い。中島は、これらに、共通しているのは、強い抑うつや、不安、不眠、悪夢、恐怖、無力感、戦慄といった現在の症状や極端な活動性は、過去の精神的、身体的な苦痛や、家族からの拒否や虐待という外界の理由によって「心が傷つけられて」いるために起こると考える点にある、と的確に指摘している^{*27}。「これは、主体である自己の行為、決断、選択を無視し、単なる刺激への反応という見方」であり、先に使った言葉を今一度使うと、人間を reactor と見ることである。あなたが悪いので

はない、というように治療者が語ることに、はたしてどんな意味があるというのか。

野田が指摘しているように、アドラー心理学は、精神機能が人を動かし、絶対的な支配力を持っており、個人はどうすることもできない、病気を克服できない、人はトラウマ^{*28}に圧倒される…このような悲観的な治療論に立たくない>のである。

16. 責任

アドラー心理学においては、以上見てきたように、個人がすべてを人生の瞬間瞬間において選び取っていると考えるわけであるから、個人の責任を問う非常に厳しいものである。が、しかし、他方、感情、性格、過去の経験、病気、外部の出来事…これらのものが人を支配するのではなくい>が故に、教育、治療は可能であると考ええる。

17. まとめ

人はいつも決断し選択することができ、アクラシアーのように見える事態はあるが、決して外因的な (exogenous) 要因によって支配されるのではない。人はいかなる場合も知を選択するという意味で、行為の責任を免れることはできない。「知る」と「行う」ことは矛盾することはないのである。

注釈

- *1 本稿は、1997年10月10日早稲田大学で開催されたアドラー心理学会第14回総会における演題発表原稿に加筆したものである。
- *2 岸見一郎、「原因論と目的論ーギリシア哲学からの考察ー」、『アドレリアン』第11巻第2号、1997年。
- *3 野田先生からは多年にわたって教えを受けているので出典があるというより、いろいろな機会に聞いているといった方が適切かもしれない。しかし、本稿が成るにあたっては、「カウンセラー講座基礎編第1巻」(テープ)に特に負っている。
- *4 ただし、理論、思想、技法は、深いところで相互に関係しあっていて、不可分な全体を構成するのであるが、「便宜的」に三つを分けて考える必要を感じている、という野田の発言には注意したい(野田俊作、「思想・理論・技法」、『アドレリアン』第6巻第2号、1993年、p.69)。
- *5 中島弘徳、「目的論に関する一考察」、『アドレリアン』第11巻第2号、1997年、p.127。
- *6 Marx, K., *Eleven Theses on Feuerbach, 1845* ('Philosophers have only interpreted the world in various ways, but the real task is to alter it.' 「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝腎なのはそれを変えることである」、「フォイエルバッハに関するテーゼ」、大内兵衛、細川嘉六訳、『マルクス=エンゲルス全集第3巻』大月書店、1979年[1963年]、p.5)
- *7 アドラー、『個人心理学講義』岸見一郎訳、一光社、1996年、p.11、及び、第1章訳注(1)、p.12。
- *8 ソクラテスは、自分は何も知らない、と知っているわけであるから、積極的に自分が何かを

知っているとはいえないのである。なお、ついでながら、ソクラテスが著作を一冊も残していないということ、従って、ソクラテスについて知るためには、後人の証言に依らなければならない。最も信頼に値するのは、プラトンの著作であり、本稿において、ソクラテスが…と知っている、という場合、プラトンの著作からの引用である。ただし、プラトン自身の思想にも変化があったわけであり、初期のプラトンの対話篇がソクラテスの思想を表しているとしても、後にはプラトン独自の哲学の展開が見られるはずである。私見によれば、プラトンの初期の対話篇に見られるソクラテスの思想は、アドラーに通じるものがあるが、後年の思想、とりわけ、魂の三分説は、一見したところ、徳は知であるという考え、また、アドラーの全体論とは相容れない。ソクラテスのパラドクスがプラトン哲学の中でどのように位置づけられているかが、私の修士論文のテーマであった（「ソクラテスのパラドクスの行方」）。これらのことについては、稿を改めたい。

*9 岸見、前掲論文、p. 111 ここでは重複をいとわず引用する。

*10 岸見、前掲論文、p.108.

*11 アドラー、『個人心理学講義』第1章、訳注(6)、pp. 17 – 8.

*12 岸見、前掲論文、P. 110. また、中島、前掲論文、P. 125 も参照。

*13 岸見、前掲論文、p. 109.

*14 アドラーは、これらを 'material' という。

*15 中島、前掲論文、p. 125.

*16 「柔らかな決定論」については、アドラー、『個人心理学講義』第1章、訳注(20)、p. 25.

*17 ここで取り上げた背丈、以下に取り上げる井戸水、貨幣の例を引いての考察は、いずれも藤澤令夫、『世界観と哲学の基本問題』岩波書店、1993年、pp. 48 – 62、「背丈比べのパラドクスー“状況”の変化と“もの自身”の変化ープラトン『テアイテトス』(154B – 155D)における背丈比べのパラドクスの哲学的意味ー」(『哲学研究』第505号、京都哲学会編、1984年)に負う。

プラトンの『テアイテトス』の中で次のようにいわれている。年をとったソクラテスと、テアイテトスという二十歳前の青年の背丈を比べると、今はソクラテスの方が背が高いが、テアイテトスは伸び盛りであるから一年後にはソクラテスの方が小さくなったとする。すると、ソクラテスは、大きさの点では、一方で元のままであるのに、他方では小さくなった、これは一体どういうことか、と。藤澤は、この問題についてこれまでなされた諸解釈に反対する。結論だけを端的にいえば、プラトンは、テキストの記述からみて、疑いもなく、「ソクラテスの大きさは決して元のままではない、実際に変化したのだ、より小さくなった」と結論づける。

どんな条件とも無関係な性質(F)というものはいえぬ、と考えるのである。

*18 中島、前掲論文、p.126.

*19 岸見、前掲論文、2. ギリシア哲学における自然探求 (pp.108 – 9) を参照。

*20 この点については、岸見、前掲論文、8. 価値の問題 (p. 113) を参照。

*21 'schcinbare Kausalitat', Adler, Der sinn des Lebens, Fischer Tachenbucher, 1980 (1933), S. 23.

*22 Adler, ibid., S29.

*23 DSM-IV における PTSD の診断基準の一つとして、「トラウマを思い出させるような活動や場所や人を避けようとする努力」があげられている。トラウマ、PTSD については、本稿、15 節 治療的意義を参照。

*24 アドラーの目的論は、この semblance of causality が因果関係が「ある」と考えるのとは逆に、「あたかも何一つ因果論的に決定されていないかのよう」(野田俊作、「仏教の因果論」、

『アドレリアン』第11巻第2号、1997年、p. 116) 考えるのである。

*25 individual の語義については、アドラー、「個人心理学講義」解説、p. 257 を参照。

*26 岸見、前掲論文、p. 112.

*27 中島、前掲論文、p. 125.

*28 いわゆるトラウマは必ずしもトラウマである必要はない。ある経験をトラウマであると見なせばトラウマになるというに過ぎない。アドラーがトラウマを否定していることについては、Adler, *What life could mean to you*, trl. by Colin Brett, 1994 (1931), p. 24 を参照。

更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載